

# 韓國高校日本語 I 教科書 語彙分析

## － 第7次教育課程による第二種教科書 －

伊藤美津子\*

咸美燕\*\*

---

### 目次

---

1. はじめに
  2. 分析方法
  3. 調査結果
  4. まとめ
- 
- 

## 1. はじめに

韓国では2002年から第7次学習指導要領が新しく施行され、高校の現場では2003年から、7次の指導要領にしたがって作成された新しい教科書で授業が行われている。

第7次学習指導要領に示された「日本語 I」科目の性格について見ると、「日本語 I」科目は言語の4技能を基本的水準から扱い、バランスのとれた意思疎通能力を養う基礎的な科目であると書かれている。またその目標には(가)、(나)、(다)、(라)の項目の順で「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能があげられていることから、第7次日本語 I の教科書では、この4技能に重点が置かれていると思われる。

また第7次学習指導要領では「日本の文化について深い関心を持ち、日本文化を理解しようとする姿勢を育て、日本との国際交流に積極的に参加する態度を持つ」という「文化」の項目と、「インターネットを通して日本語による基礎的な方法を知り、情報検索に興味を持つ」という「インターネット検索」が目標の項目としてあげられており、これは第6次学習指導要領とは異なる点であると言える。

そこで本調査では各教科書の語彙選定と使用数、また使用箇所などについて調査することで、各教科書の語彙の実体とその特徴を明らかにし、上記の第7次学習指導要領が示す「日本語 I」科目の性格と目標をどの程度充實しているのかを調べてみることにした。

---

\* 長安大學 専任講師 日本語通譯科 / 同德女子大學院 修士課程

\*\* 同德女子大學院 日語日文科 修士課程

## 2. 分析方法

### 2-1. 分析対象

現在、韓国の一般高校で使用されている日本語教科書は、検定教科書（第二種教科書）全12種である。（外国語高校は原則として国定教科書を使用）

本調査で対象とした教科書は、第7次教育課程に基づいて作成された、韓国 高等學校「日本語 I」の検定教科書12種のうち、第1回目の検定に合格した4冊である。

<表1> 分析対象

教科書	教科書名	著者	出版社
A	日本語 I	김숙자 他 3인	大韓教科書
B	日本語 I	유길동 他 3인	進明出版者
C	日本語 I	이현기 他 3인	進明出版者
D	日本語 I	한미경 他 3인	ブラックボックス

分析の際に、まず各教科書のテキストデータベースを作成したが、入力の対象にした部分は原則的に、教科書に提示されている日本語すべてである。

これには、挿繪のなかの日本語や、クイズやテストで選擇する答えとしてあげられている日本語も含まれる。

ただし、並べ替え問題や、間違い探しなどで、「正しい日本語」として、成立しない表現のものは対象から外した。

### 2-2. 分析内容

分析の内容は以下の5つである。

- 1) 各教科書の「延べ語数」と「異なり語数」
- 2) 各教科書の分野別「延べ語数」と「異なり語数」
- 3) 語彙の教科書内での分布（四技能とその他の分野別）
- 4) 學習指導要領で示されている「基本語彙」との比較
- 5) 四技能の語彙水準比較

まず、各教科書ごとに「延べ語数」を調査し、一冊の教科書のなかに全部でどれほどの語彙が含まれ

ているかを調べた。

そして、そこから同じ語彙を抜き取った「異なり語数」を調査し、その教科書のなかの純粋な「語彙数」を調べた。

ここで、「延べ語数」と「異なり語数」の両方を調べた理由は、教科書全体の総語彙数（延べ語数）とそこから、重なる語彙を抜き取った「異なり語数」を調べることで、その教科書における語彙の出現率を知ることができるからである。

また、今回の調査では、動詞や、名詞などに分けて、それぞれの出現率を見ることはせず、教科書全体の語彙の出現率だけを調べることにした。

次に、各教科書で出された「延べ語数」と「異なり語数」が、教科書のどの部分に現れているのか、その散らばりを見るために、一冊の教科書を「聞く」「話す」「読む」「書く」の「四技能」とその他の分野に分けて、それぞれの分野での「延べ語数」と「異なり語数」を調査した。

最後に、それぞれの教科書で出された「異なり語」が、学習指導要領に提示されている「基本語彙」をどれくらいカバーしているかを調べ、各教科書の適切な語彙選定を検討してみた。さらに、「四技能」分野別に「基本語彙」と比較し、「話す」「聞く」「読む」「書く」の分野で語彙レベルにおいて、差があるかを調べてみた。

## 2-3. 分析方法

まず各教科書ごとに本文をハングルファイルに入力し（A-1、B-1、C-1、D-1データベース）、それを一定の単位で分割し<sup>1)</sup>、単位レベルのデータベースを作成する。（A-2、B-2、C-2、D-2データベース）

次に分割したそれぞれの単位を基本形に直し、基本形単位レベルのデータベースを作成する。（A-3、B-3、C-3、D-3データベース）

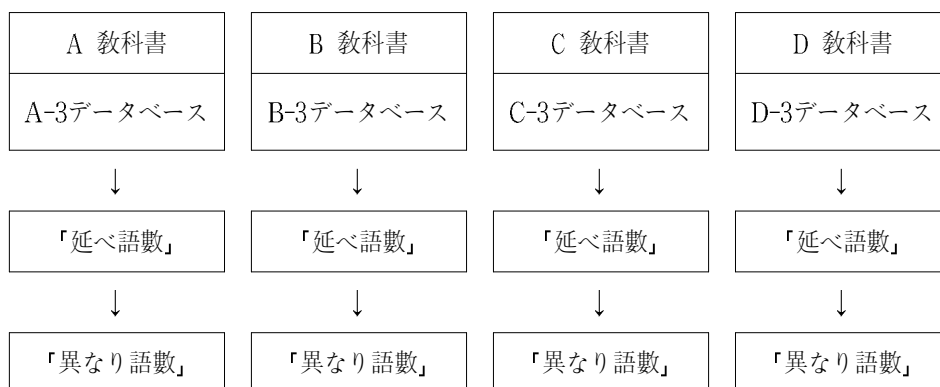
<表2> データベース作成の過程

作業	作業結果
教科書の本文を入力	「テキストデータベース」 (A-1,B-1,C-1,D-1)
↓	↓
本文を分割	「単位レベルのデータベース」 (A-2,B-2,C-2,D-2)
↓	↓
各単位を基本型にする	「基本型単位レベルのデータベース」 (A-3,B-3,C-3,D-3)

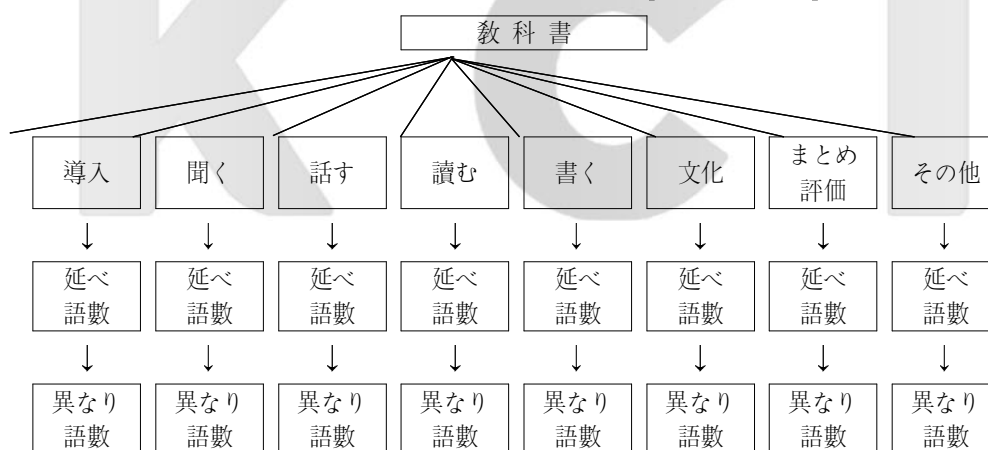
1) 分割の方法については강성아(1999)を参照されたい

次に基本形単位レベルのデータベースを使用し、各教科書の「延べ語数」と「異なり語数」を調査し、さいごに各分野別<sup>2)</sup>に語彙を分割し、それぞれの分野の「延べ語数」と「異なり語数」を調査した。

<図1> 教科書ごとの「延べ語数」と「異なり語数」の調査



<図2> 教科書における分野別「延べ語数」と「異なり語数」



<表3> 教科書別分野構成

2) 教科書の各分野については表 3 を参照 されたい

分野	A 教科書	B 教科書	C 教科書	D 教科書
導入	・扉 (タイトル,案内文)	・扉 (タイトル,案内文) ・さあ、はじめよう	・扉 (タイトル,案内文)	・扉 (タイトル,案内文)
聞く	・きいてみましょう	・まず、聞こう ・たのしく聞こう	・聞いてみよう ・聞いていってみよう	・聞いてみましょう ・聞きながらやってみましょう
話す	・はなしてみましょう ・はつおん	・話してみよう ・たのしく話そう ・イントネーション	・言ってみよう	・話してみましょう ・コミュニケーション活動
読む	・よんでみましょう	・ダイアログ ・読んでみよう	・読んでみよう	・書いてみましょう
書く	・かいてみましょう	・書いてみよう	・書いてみよう	・書いてみましょう
文化	・扉 (文化のところ)	・일본문학산책	・일본인과생활문화 ・일본의 고등학생	・楽しくあそびましょう (文化のところ) ・日本を知る
まとめ 評価	・자율학습 ・확인학습	・まとめてみよう ・いっしょにやろう	・まとめてみよう ・自分でやってみよう	・まとめ ・やってみましょう
その他	・やってみましょう ・보충심화학습	・いっしょにやろう (3과,4과①,7과① ②,10과①)	・みんなでやってみよう	・楽しくあそび ましょう(ゲーム歌など)

### 3. 分析結果

#### 3-1. 各教科書の「延べ語数」と「異なり語数」

<表4>を見ると、延べ語数が最も多いのはD教科書の7490語、最も少ないものはC教科書の3726語であり、D教科書にはC教科書の約2倍の延べ語が出現している。

また異なり語数ではA教科書が最も多く602語、つづいてD、B、Cの順である。C教科書の476語を除いて、A、B、Dそれぞれ約600語であることから、C教科書に出現する異なり語数が他の教科書と比べて少ないことが分かる。

第7次学習指導要領に提示されている基本語彙数は「日本語I」で約500前後である。したがって、語彙数に限って判断すると、C教科書が最も適当であると言える。

<表4> 「延べ語数」と「異なり語数」(延べ語数 / 異なり語数)

	A	B	C	D
導入	378 / 153	499 / 175	353 / 136	410 / 150
聞く	288 / 118	270 / 112	225 / 76	64 / 28
話す	924 / 239	1098 / 254	1087 / 226	1385 / 312
読む	1499 / 347	1806 / 345	629 / 209	2668 / 420
書く	671 / 240	297 / 132	140 / 73	537 / 167
文化	11 / 11	50 / 46	52 / 46	26 / 19
まとめ・評価	1938 / 339	1245 / 272	1103 / 287	2201 / 375
その他	719 / 244	131 / 62	137 / 67	199 / 84
計	6428 / 602	5396 / 585	3726 / 476	7490 / 598

さらに、各教科書の「延べ語数」と「異なり語数」から、その教科書における語彙の出現率がわかる。A教科書は9.3%、B教科書は10.8%、C教科書は12.8%、D教科書は8.0%である。

このことから、「同じ語彙が何回も繰り返して現れている」のは、C教科書で最もその傾向が高いと言える。

また、四技能における「延べ語数」と「異なり語数」と見ると、C教科書をのぞく全ての教科書で、「読む」の分野における「延べ語数」と「異なり語数」の両方がもっとも多いことから、C教科書以外は「読む」の分野に語彙が集中していると言える。

「文化」の分野を見ると、4冊全ての教科書を通して、「延べ語数」と「異なり語数」にそれほどの違いはない。これは、「文化」の分野では文化に関する「語彙」の習得を目的としているのではなく、「文化」に関する内容の伝達をめざしているためであると思われる。

その一方で、「まとめ・評価」の分野では、全ての教科書で「延べ語数」と「異なり語数」に大きな差があり、同じ語彙を何度も繰り返して出現させ、練習させることで、語彙の習得をはかっていることがうかがえる。

次に、「四技能」の分野で各教科書を比較しながら、それぞれの特徴を見ていきたい。

まず、「聞く」分野では、A、B、C教科書では、「延べ語数」が全て200語を超え、「異なり語数」も、最も少ないC教科書で76語である。

それに對し、D教科書は「延べ語数」が64語、「異なり語数」が28語となっており、D教科書の「聞く」分野に含まれる語彙は、他の3種に比べかなり少なくなっている。

次に「話す」分野を4種の教科書を通して見ると、それほど差はない。

しかし各教科書に含まれている全体の語彙に対する比率を考えると、C教科書の「話す」分野に含まれている語彙率が他の3種に比べて圧倒的に高いことから、C教科書は「話す」分野に語彙を集中させているとすることができる。

「読む」の分野では、D教科書が「延べ語数」も「異なり語数」、他の3教科書に比べ圧倒的に多い。このことから、D教科書は「四技能」のなかでも「読む」に重点をおいているとすることができる。

最後に「書く」分野を見ると、A、D教科書が「延べ語数」が500を超えているのに対して、Bは約300、Cは約150とかなり少ない。しかし、「異なり語数」を見ると、A教科書が最も多く、4種の教科書の中ではA教科書が最も「書く」の分野に語彙を集中させている。

### 3-2. 延べ語の教科書内での分布(四技能とその他の分野別)

図3、4、5、6を見ると、各教科書に出現している延べ語の50%以上が「四技能」の分野に含まれており、その中でもB教科書が最も高く65%で、続いてD教科書の63%である。

全教科書を通して「文化」の分野での比率がかなり低いことを見ると、文化に関して書かれているページ数が少ない、あるいは書かれていても韓国語で書かれている場合が多いことがうかがえる。

「まとめ・評価」の分野では、B教科書が他の3教科書と比べ少し低くなっている。

図3. A教科書 延べ語分布

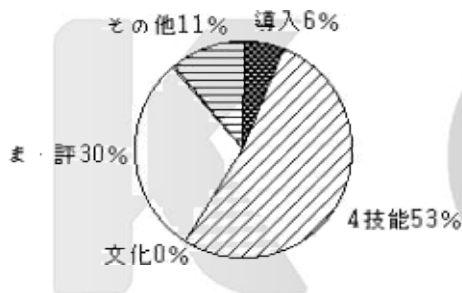


図4. B教科書 延べ語分布

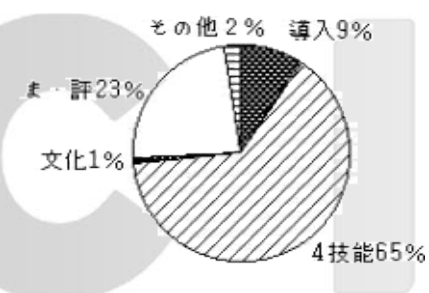


図5. C教科書 延べ語分布

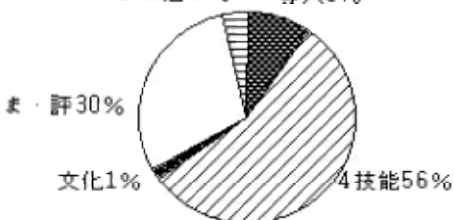
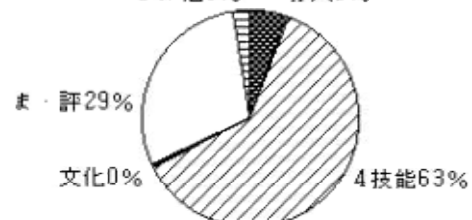


図6. D教科書 延べ語分布



### 3-3. 異なり語の教科書内での分布 (四技能とその他の分野別)

図7. A教科書 異なり語分布

図8. B教科書 異なり語分布

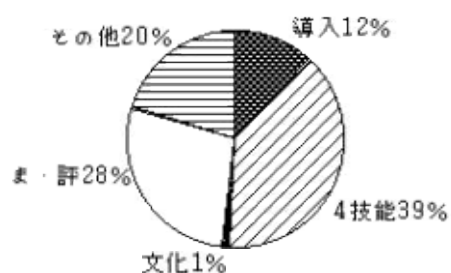


図9. C教科書 異なり語分布

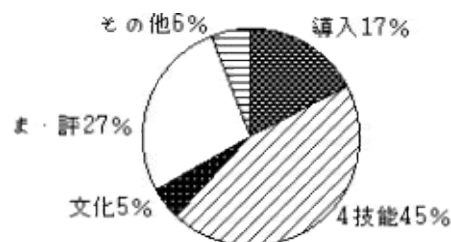


図10. D教科書 異なり語分布

図7、8、9、10で各教科書の異なり語の分布を見ると、四技能で最も高い比率を示しているのがD教科書の46%、つぎにB教科書の45%、C教科書の41%で、いちばん低いのはA教科書で39%である。

延べ語分布では全教科書で四技能の分野が50%以上の比率を示していたことから、四技能の分野では同じ語彙の出現率が高く、また異なり語の分布では「導入」「文化」「その他」の分野の比率が増えていることから、これらの分野では同じ語彙の出現率が低いことがうかがえる。

第7次学習指導要領では「日本語I」は「四技能を中心」とする意思疎通機能を育成する科目であると書かれているが、上の図から見ると「評価とまとめ」の分野に含まれている語彙もかなりの数を示している。

これは、「評価とまとめ」の分野で、その内容にしたがって、さらに「話す」「聞く」「読む」「書く」と細分化せず、大きく「評価とまとめ」と一つにしてしまったことが原因の一つであると考えられる。「四技能」における語彙の散らばりを正確に知るためにも、それぞれの内容にしたがって、さらに細分化することが今後の課題として残される。

### 3-4. 学習指導要領で示されている基本語彙との比較

各教科書の「四技能」と「文化」の分野における「異なり語」のなかに第7次学習指導要領に提示されている「基本語彙」がどのくらい含まれているかを調べてみた。



&lt;表5&gt; 分野別 異なり語の基本語彙含有率

A 教科書		B 教科書	
8分野 平均	70.4% (424/602)	8分野 平均	68.4% (379/585)
聞く	89.0% (105/118)	聞く	75.0% (84/112)
話す	80.8% (193/239)	話す	80.3% (204/254)
読む	76.1% (264/347)	読む	75.9% (262/345)
書く	79.2% (190/240)	書く	86.4% (114/132)
文化	45.5% (5/11)	文化	6.5% (3/46)

C 教科書		D 教科書	
8分野 平均	65.8% (313/476)	8分野 平均	75.0% (445/593)
聞く	82.9% (63/76)	聞く	75.0% (21/28)
話す	82.3% (186/226)	話す	80.8% (252/312)
読む	76.6% (160/209)	読む	80.5% (338/420)
書く	78.1% (57/73)	書く	88.0% (147/167)
文化	10.9% (5/46)	文化	57.9% (11/19)

基本語彙含有率を見ると、もっとも高いのはD教科書の75.0%で、つづいてA教科書の70.4%である。

分野別に見ると、「聞く」分野ではA教科書の89%が最も高く、「話す」分野ではC教科書が若干ではあるが、他の教科書よりも高くなっている。また「読む」分野ではD教科書がほかの3種よりも約5%高く、「書く」分野でもD教科書がもっとも高い数値を示している。

さらに、D教科書をのぞく、すべての教科書の「読む」分野の基本語彙含有率が他の分野に比べて低くなっている。このことは、「読む」分野では他の分野に比べて「基本語彙」に含まれていない比較的難しい語彙がより多く含まれているということである。

さらに、四技能の各分野に一度だけ出現した「異なり語彙」の数を調査した結果、全ての教科書に共通して、「読む」の分野に一度だけ出現した語彙が最も多かった。

以上のことから、四技能の中では「読む」分野の水準が他の四技能の分野よりも高いと言えることができる。

次に「文化」の分野の基本語彙含有率を見ると、教科書間でその含有率に大きな差がある。B、C教科書では語彙がたくさん出現しているにもかかわらず、その基本語彙含有率が6.5%、10.9%と著しく低い。

このことから、B、C教科書の「文化」分野に出ている語彙が文化の基本語彙から著しく外れているか、あるいはもともと学習指導要領に提示されている「文化」に対する基本語彙が少ないということが

考えられる。

しかし分析からはB、C教科書ともに文化に關して著しく外れた語彙を使用しているとは思われず、やはり基本語彙に提示されている文化に關する語彙が少ないということが明らかになった。

ちなみに、B、C教科書の「文化」の分野に現れていた語彙は、以下のようなものである。

「ごはん、みそしる、つけもの、うめぼし、たたみ、しょうじ、こたつ、とこのま、お歳暮、お中元、お土産、プレゼント、祭り、みこし、花火大會、おおずもう、よこづな、甲子園、まんが、アニメ、お正月、ひな祭り、ゴールデンウィーク、こどもの日、こいのぼり、七夕、お盆、体育の日、文化の日、大みそか、茶道、生け花、書道、能、狂言、文樂、歌舞伎、とんかつ、繪馬、箸置き、神道、國技、燃えるごみ、燃えないごみ、牛乳パック、プラスチック、乾電池、リサイクル、フリーマーケット、讀賣・朝日・毎日・日本經濟・産経新聞、元日、成人の日、建國記念日、春分の日、緑の日、憲法記念日、敬老の日、秋分の日、体育の日、文化の日、勤勞感謝の日、天皇の誕生日、桃の節句、ひな祭り、ひな人形、五月人形、」

#### 4. まとめと今後の課題

今回の調査を通して、以下のようなことが明らかになった。

1. 教科書に出現する延べ語数は、最も多い教科書は、最も少ない教科書の約2倍の数が出現しており、教科書間でかなりの差があった。
2. 異なり語数はC教科書を除いて、すべて600語前後であった。
3. 教科書に出現する延べ語数と異なり語数から、各教科書で同じ語彙が繰り返し出現する率はC教科書でもっとも高かった。
4. 四技能別に語彙数見ると、A、B、D教科書は「讀む」に語彙が集中していた。
5. 「文化」の領域での語彙数がどの教科書においてもかなり少なかった。
6. 語彙の分野別分布をでは、延べ語においては50%以上が四技能分野に含まれていたが、異なり語になるとどの教科書においても50%を満たなかった。
7. 各教科書の語彙における基本語彙率は、70%前後であった。
8. 「讀む」分野においての「基本語彙」含有率が他の分野よりも低く、ほかの分野よりも語彙のレベルが高かった。

學習指導要領が第7次に新しく改訂され、日本語科目は「四技能を基本的水準から扱い、バランスのとれた意思疎通能力を養う基礎的な科目」と位置づけられているが、各教科書に出現する語彙をみると、四技能の各分野の間で語彙数、また語彙レベルでもかなりの差が見られた。

また、四技能を中心として學習目標があげられているが、語彙含有率はどの教科書においても5

0%以下で、果たしてこの比率で四技能中心と言えるかどうかと言う点には疑問が残る。

さらに第7次では「文化」や「インターネット検索」の項目が新しく付け加えられているにもかかわらず、学習指導要領に提示されている基本語彙にはそれらに関する語彙が非常に少ない。したがって、まず基本語彙でそれらの項目に関する語彙を増やし、各教科書で「文化」や「インターネット」に関する語彙を使用した内容が増えることがこれから期待される。

## 【参考文献】

- 이한섭(1997) 「어휘 조사 단위에 대한 연구 -일본 국립국어연구소의 각종 어휘 조사 단위를 중심으로-」국립국어연구원
- 강성아(1999) 「日本語教科書の語彙調査研究」고려대학교대학원
- 李德奉(1998) 「日本語教育의理論과方法」時事日本語社
- 工藤眞由美(2002) 「日本語學と日本語教育との關係」  
(『總合的日本語教育を求めて』國書刊行會82-98頁)
- 坂本一郎(1984) 「私の基本語彙論」日本語學 2月号 Vol.3 11-27頁
- 林四郎(1971) 「語彙調査と基本語彙」國立國語研究所報告89 1-35頁  
電子計算機による國語研究Ⅲ國立國語研究所
- 林四郎(1984) 「私の基本語彙論」日本語學 2月号 Vol.3 16-23頁
- 山下喜代(1993) 「日本語教科書の語彙」日本語學 2月号 Vol.12 54-64頁

## 要 旨

第7次學習指導要領に示された「日本語 I」科目の性格は「言語の4技能を基本的水準から扱い、バランスのとれた意思疎通能力を養う基礎的な科目である」と書かれている。また第7次學習指導要領では「日本の文化について深い關心を持ち、日本文化を理解しようとする姿勢を育て、日本との國際交流に積極的に参加する態度を持つ」という「文化」の項目と、「インターネットを通して日本語による基礎的な方法を知り、情報検索に興味を持つ」という「インターネット検索」が目標の項目としてあげられており、これは第6次學習指導要領とは異なる点であると言える。

本調査では各教科書の語彙選定と使用数、また使用個所などについて調査することによって、第7次の各教科書の語彙の実体とその特徴を明らかにし、上記の第7次學習指導要領が示す「日本語 I」科目の性格と目標をどの程度充實しているのかを調べてみることにした。

キーワード：高校日本語教科書, 第7次學習指導要領, 語彙(延べ語數・異なり語),  
四技能, 文化, 基本語彙

투 고 : 2004. 5. 31  
1차 심사: 2004. 6. 12  
2차 심사: 2004. 7. 3

1. 제1필자: 伊藤美津子

住 所: (425-801)京畿道安山市단원區고잔洞 523-2 two-one blessing 618号

電 話: 016-542-7776

E-mail: mitsukoito@hotmail.com

2. 공동연구자: 함미연

住 所: (423-033)경기도 광명시 철산 3동 철산한신아파트 111동 901호

電 話: 016-342-9214

E-mail: angeham@dreamwiz.com

K C I